

国語
算数
理科
デザイン!



秋田県
2022

表 1



若者と地域をつなぐプロジェクト事業

akitade.jp

主催：秋田県 あきた未来創造部地域づくり推進課
運営：一般社団法人ドチャベンジャーズ 企画・トータルディレクション：澁谷デザイン事務所

表 4





「国語・算数・理科・デザイン!」最終成果報告会 | 2022.12.18 | 会場:あきた文化産業施設「松下」2階大広間

国語や算数、理科や社会を学ぶみたいに、地域を観察したり、地域を感じたりする『デザイン』の授業があったらいいのになあ

ただただ観察する、デザインの旅

日常にあふれている、日々の隅々を『観察』することをつけかけに、地域を意識し、地域とつながろうとする感情を育み、そしてその先に何らかの行動・アクションを見出そうと、もがき続けた半年間のデザインプログラム「国語・算数・理科・デザイン！」。

今年の観察のテーマはズバリ！「食べる」。県内の高校生で構成された合計11チームが、日常にあふれている「食べる」の周辺を観察し、半年間「地域とつながるとはどういうことだろう？」と悩み続けました。そしてその先に自分自身の本当の感情が動き出すのをじっと待ち、耐え続けた「葛藤の過程」を正直に愛で合い、大切にしてきました。

「まずは家にある『冷蔵庫』をじっくり観察しましょう！」という身近で何気ない存在の観察トレーニングからはじまった半年

間のデザインの旅。そんな手探りな初めての旅にチャレンジしてくれた高校生たちの、嘘偽りのない半年間の『本音(過程)』。今回、それを地域の方々にもしっかり見届け感じていただきたいと思い、最終成果をまとめたのがこの一冊です。

どこかで見たことのある、いかにも正しいような答えに頼ることなく、悩み苦しんだ過程をそのままに見せ、曝け出すということは、とても怖くて勇気のいることだと思います。しかし、その不安と葛藤にめげることなく、「地域とつながる実感」を模索し、泥臭く掴み取ろうとした軌跡こそが、参加者全員の成長の証であり、この事業の成果だと信じています。

そんな全11チームが必死に駆け抜けた半年間の軌跡を、たっぷり、そのまま地域の方々に感じていただけたら幸いです。



一人の時間が欲しい篠原さん(右)と、みんなと一緒にいるのが楽しい岩井さん(左)。そんな真反対の性格の2人で結成されたチーム『マイ・バラード』。性格的に違うところはたくさんあるけれど、どこか気が合うという面白い関係性の2人は、最初の課題である「観察日記」に積極的に取り組んできた。食べる風景、手に取った商品、屋台での食べ物など身近なところから観察をスタート。

そのような観察を進めていく中、徐々にそれぞれが気になるものが出てくる。篠原さんは大好物のスイカに着目し、それぞれの店のスイカの味、産地、糖度、値段、種の数、またスイカ味のお菓子に至るまで、徹底的に「オタク」的な調査を進めていった。また「スイカ愛」を公言することで、周りの人を巻き込んでしまう力や『推し』の力などに気づき、スイカから派生して、食べるにとどまらない様々な観察を進め、経験を深めていった。また、一方の岩井さんは当初から興味のある商品の形やパッケージなどの観察を進めていった。パッケージに書か



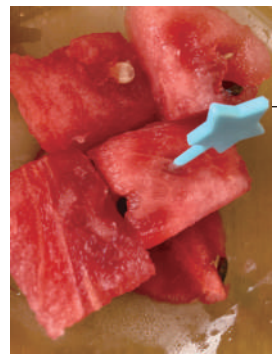
あなたのイチャオシ代行します

マイ・バラード

岩井さん(左)、篠原さん(右)



缶コーヒーの空き缶がペン立てとして活用されている光景の観察
[写真提供: 岩井さん]



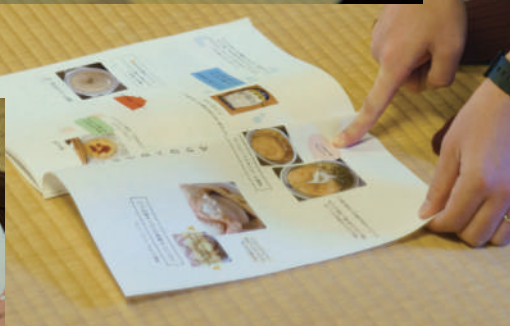
「今日も今日とてスイカ愛」ローソンのカットスイカの観察
[写真提供: 篠原さん]

「チャームポイント」
やや弾力があり、甘さはほぼなし泣みずみずしさも△でもビックが可愛い☆
【種の数】12粒(5,6カット)
【産地】長野県
【糖度】記載なし(糖質は8.8g)
【値段】259円(税込)

れていた普段気付かなかったメッセージや、使い終わったパッケージがメモ帳やペン立てとして使われている様子など、日常の中にたくさんさんの発見をする。また、毎日電車やバスを使い、家と学校の間を長距離通学する中で、駅で人の様子も観察してみたり、食の周辺だけには収まらない幅広い観察に発展していった。

そして9月終わり頃、この事業の運営チーム『MOD(もっとお尻を出す)の略』から「これからはチームで観察をしてみよう」とアドバイスを受けると、2人は悩みながらもこれまでのお互いの観察からチームでの方向性を模索していく。10月のオンラインワークショップ時点での2人のテーマは『中身と外見の矛盾』。これまでの2人の観察において篠原さんは商品の中身、岩井さんは商品の外見に興味があったことから出てきたテーマであった。だが、数週間後のMODとのメンタリングの際、2人から出てきた言葉は「推しの観察をしたい!」だった。より2人がワクワクしていた初期の観察に戻り、『推し』すなわち、好きな

自分の中の好きなものを
誰かに共有することって
楽しいんだ！



チーム「マイ・バラード」の
2人が作成した雑誌「BALLAD」

もの（イチオシのもの）があること、またそれを人と共有することの楽しさについて考えてみたい！ クラスの人にアンケートをとって、オススメされたものを全部やってみたい！ という衝動から、いよいよ観察の先の旅が動き出す。

クラスメートの推しを全部やってみる！ とはいえ、どんなアンケートにするのか？ アンケートのタイトルはどうするのか？ テスト期間などで忙しい中でどうやって進めるのか？ ……など決まっていないことが多くある中で、2人はクラスメートの推しを知るために悩みながら、一般的な正解を求めることなく、背伸びすることもなく、着実にできることを進めていった。そして、考え抜いた結果『イチオシ代行』というプロジェクト名にたどり着き、様々あるであろう『推し』の中でも、今回は『食べ物の推し』に着目し、クラスメートみんなが好きな食べ物や、オススメの食べ合わせについて調べるアンケートを作成。それぞれのクラスでアンケートを配付、結果約80人もの同級生から『推し』の回答を得た。

そうして迎えた最終報告会当日、2人は『BALLAD』という雑誌を作成しステージに立っていた。そこには2人の衝動が突き動かしてきた『イチオシ代行』の歩みがあり、これでもかと盛り込まれていた。ありそうでなかった食べ合わせから、「シュークリーム×味噌ラーメン」のような、「え？」と目を疑ってしまうような組合せまで、実際に2人で実践して見た感想が『BALLAD』中にはびっしり！ もちろん無謀な食べ合わせもあり、正直試してみたくないような『推し』もあったはず……。しかし、そこで先入観を持たず、まずは一度自分たちがやってみて、相手の『推し』を理解しようとしてみることに。そんな2人の正直でまっすぐな姿勢が伝わってくる雑誌だった。

半年間のプロジェクトの中で「自分の中の好きなものを共有することって楽しいんだ！」ということに気づき、一番身近な地域である学校の友達と『推し』を通じてつながろうとした彼女たち。素直に自分や周りに向き合い、企画し実行し尽くした2人の笑顔は満足げだった。



「おたく」の3人が修学旅行先で観察した関西のたこ焼き [写真提供: おたく]



「たこポン」の調査風景



たこ焼き マスターへの道

おたく

チームのメンバー3人それぞれに熱烈な「推し」がいることから命名、誕生したチーム『おたく』。そんなおたくな3人が見出したテーマは「たこ焼きマスターに、私たちはなる！」。

このテーマに行き着くまでに、3人は「食べる」とことん観察した。「パーベキューが肉ではなく海鮮系だと少し残念」という気持ちや、「おばあちゃん手握るおにぎりはなぜかとてもおいしい」という不思議など、観察の先にある感情もすっかり自分たちの中に育んでいった3人は、夏に運営チームMODから出された「パーティをやろう」という課題で、気になる存在『たこ焼き』に出会う。最初は、「パーティといえばタコパ」という単純な考えの上でたこ焼きを作っただけだった3人。しかし、タコパの最中に疑問が次々と浮かび始める。「なぜ、たこ焼きは丸いの?」「当たり前のようにタコが入ってるけど、本当は何が一番合うんだろう?」そんな疑問を原動力に、『おたく』はいよいよ『真のおたく』になるべく動き出す。

まず手始めに、大きな紙にたこ焼きの絵を描き、そのまわりにたこ焼きへの疑問を書き連ねていく。秋田の冬の風物詩「あじまん」の店舗でひっそり売られている「たこポン」と呼ばれるたこ焼きを、放課後食べに行ってみた。「本気で、たこ焼きマスターになりたいのであれば、どうにかしてでも、たこ焼きを食べに行こうとすべきではないか?」という運営チームMODの問い掛けに感化されたのか、修学旅行の日程の制限上、自由に食べに行けるか心配だった状況の中で、本場大阪のたこ焼きを食べてみた。京都の清水寺の参道でも、たこ焼き屋を見つけては迷わず食べてみた。そしてなんと最終成果報告会当日には、調理するための施設を借りる段取りをして、たこ焼きに合いそうな食材を買って、作って、ギリギリ報告会の会場に持ち込むという前代未聞な行動に出た『おたく』! しかも、彼女たちがたこ焼きを持ち込んだ場所は、秋田でも歴史ある旧割烹松下! 自作したたこ焼きには、秋田の「米粉」と「いぶりがっこ」といった「地域」の要素も盛り込む工夫が凝らされていた。



気づいたら秋田の役に立っちゃった!

そんなパワフルな3人だが、最初は行動よりも「秋田のために」アイデアを考えることを重視してしまっていた。しかし、3人なりに「地域」を見つめ直し、行動した末に出てきた提案は、「地域と地域を掛け合わせると、おいしいものができちゃうんじゃない?」というものだった。きりたんぼ×鹿児島の黒豚、しよつづる×明石焼き、ババヘラ×各地のフルーツなど、「大阪といえばたこ焼き」「秋田といえばきりたんぼ」という地域の枠に固定観念を取っ払った、正直で実感のこもったアイデアだった。

メンバーの1人、阿部さんは言った。「最初は「秋田のために」何かをしようと考えていたけど、まずは自分が楽しいことをしたいと思えるようになった」と。地域とつながるため「つながるのでなく、楽しんで、夢中でアクションをしていったその先に、「気づいたら秋田の役に立っちゃった! つながっちゃった!」というような素敵な巡り合わせがあることを、3人は自分に正直な、その行動そのもので我々に示してくれた。

報告会会場で「食べてみてください!」「感想も教えてください!」とみんなに試食を配る3人。たこ焼きへの飽くなき探究心に満ちたその姿勢は、正しく「たこ焼きマスター」だった。会場には「米粉がもちもちしていて、おいしい」「意外とチョコも合う!」といった声と笑顔があふれ、大盛り上がりとなった。

たこ焼きを見つめ、たこ焼きを愛した『おたく』は、気が付けば他のチームにも大きな影響を与えるチームになっていた。他のチームの1人が、『おたく』がたこ焼きについて調べているのを見て、どうしても気になって「たこポン」を買いに行ったら、いいのだ。3人の『おたく』魂は、周りを笑顔にし、周りを動かすパワーを持ち始めている。



チーム「平方米」(P34)の浦田さんがやって来た!



私ってこんなことが気になる人なんだ……

そこから3人はどんどん観察眼を開花させ、その様子を「LINE」で教えてくれるようになっていく。

「ウインナーとソーセージの違いってなんだろう？　そもそも、どうして昔の人は、動物の腸に肉を詰めようとしたの？」「雑炊は好きだけど、おかゆは食べられない。雑炊とおかゆの違いってあるのかな？」「映画館ではポップコーンがないと映画が観れない！　ポップコーンを映画館で売ろうとした人は天才じゃない？」「自分は花粉症で、トマトが嫌い。調べてみるとトマトとスギ花粉には同じタンパク質が含まれているらしい。トマトとスギに一体どんな関係があるんだろう？」などなど。

ただ観察をするだけでなく、その先に「疑問」を抱くことができていること。そして、疑問について調べようになったことに、MODは驚き、うれしかった。「私ってこんなことが気になる人なんだ」「これまで考えようともしていなかった」「日常に目が向くようになった」と言いながら観察を楽しむ姿・姿勢は、まさにデ



チーム「nym」とのLINEでの「観察日記」のやりとり。
日常の何気ない小さなことについて、丁寧に運営チームMODメンバーとのやりとりを重ねていった。
左写真は、LINEでのやり取りを提案してくれた陽さん（最終成果報告会当日は欠席）。



疑問を持つ力

nym(ニーム)

「正直、何をしたらいいかわからない……」そんな気持ちを抱えながら活動が始まった、女子2人と男子1人の3人で構成されたチーム「nym」。

実はこの「nym」というチーム、プロジェクトが始まった当初からの課題である「観察日記」も「パーティをしよう」も実行できず、また対面でのワークショップにも参加できず、運営チームMODも、「nym」とはどんな生徒たちなのか……と、とにかく不安だった。そうこうしているうちに、このプロジェクトも佳境を迎える11月、メンバーの1人である陽さんが、「私たちはLINEでのやり取りがしやすいです！　LINEでお話ししませんか？」と勇気を出して連絡をくれたのをきっかけに、「nym」と運営チームMODがつながり始める。

最初の「LINE」ミーティングでは、とにかくお互いのことを知るために、自己紹介や事業に応募した経緯などについての話をした。そして、「まずは『日常』を日々観察してみてください！」「テーマの『食べる』から離れてもいいんだよ！」と伝えると、



かり「羅列」して紹介した。会場からは「日常の中にたくさん疑問を見付けられていてすごい」「私も当たり前にもっと疑問を持てるようになりたい」という感想が寄せられた。「疑問を持つ力」を携えた『nym』が地域とつながる旅は、いよいよやっと、ここから始まる！

どしゃ降り雨の中……

国語・算数・理科・デザイン！のプロジェクトに関わり始めるなかで、観察することの面白さに気付き始めたチーム『nym』の一人・菜月さんは、友人である別チーム『てん』（P22）大倉さんの観察にも同行し、記録係として協力してくれた。どしゃ降り雨のなか、友人の協力を買って出してくれた菜月さんの姿は印象的だった。



今まで、何も考えずに生きてきた……

ザインの中心にある営みだった。12月の最終成果報告会直前。彼らの高校にMODがお邪魔した際に、メンバーの1人である菜月さんがポツリポツリと話してくれた。「観察をした先に疑問を持つって難しい。今まで、何も考えずに生きてきたから……」と。それは楽しいだけじゃない、観察の難しさに対する正直な言葉だった。ほとんどの人が日常の些細な疑問に対して見て見ないフリをして、観察の難しさに気付こうともしない。でも『nym』というチームは、高校生にしてそこに気づき、認めることができるようになっていた。

メンタリングの最中には、「これまでに見つけた疑問を羅列するだけでも面白いよ」というMODからの提案に、「羅列」って何？と素朴な疑問が飛び出す場面も（笑）。分からないことを、恥ずかしがらずに素直に問いにできること。楽しくも難しい「疑問を持つ力」こそが、観察の先に3人が得た「成果」だ。

最終成果報告会で『nym』は、これまで観察してきた「日常の不思議」をしつ

「米が好き」というシンプルな共通点を持った彼女たちは、『米カルテット』という大胆な屋号を掲げて、この事業では初となる大館^{おほだて}から参加をしてくれた。今年「食べる」が観察のテーマであったこともあり、彼女たちの観察は商品のパッケージ、成分表記、商品にまつわる歴史などからまずは始まっていく。客観的に「ただ観る」を積み上げていく彼女たちだったが、その観察の端々にはどうしても地域や彼女たちならではの**実体験**がいつも入り込んでいくように思えた。

「スイカは頂き物がほとんどで買うことはめったにない(伊藤さん)」「祖母が冷凍スイカを食べていて衝撃だった(佐藤さん)」「野菜はもらうのであまり買わない(伊藤さん)」「きりたんぼのガラはむしゃぶりつくのが一番美味しい食べ方(岩本さん)」「おじいちゃんとおばあちゃんが割った薪をストーブで炊くと家族が集う(岩本さん)」などなど。彼女たちの「食べる」の周辺には、彼女たちの生活そして**地域が密接に関わっていた**。

そんな観察が続いたある日、彼女たち

つぶ潰れたおにぎり観察!?



自分のおにぎりだけでなく、友人の潰れたおにぎりまでもが気になり記録をしてゆく『米カルテット』。修学旅行の最中にまで続いた潰れたおにぎり観察。



は「潰^{つぶ}れたおにぎり」が気になるようになる。当たり前のように毎日学校に持っていくおにぎり。せっかくなので握ってもらったのに、移動の過程を経てお昼ご飯の時間までには潰れてしまう。もう一度握り直す人もいれば、そのまま食べる人もいる。普段であれば見過ごしてしまふような「おにぎり(米)」の当たり前前の風景が、お米が大好きな4人にとっては見過ごせない大切なものだった。

自分のおにぎりだけでなく、友人の潰れたおにぎりまでもが気になって、写真に撮り記録をしまったり、修学旅行の最中にまで続いたそんな彼女たちの「潰れたおにぎり」観察は、運営チームMOD、そして他参加チームにとっても、「確かに!」とうなづける強い共感値を持つものだった。

着眼点しかり、彼女たちの観察力しかり、誰もが「米カルテットはこのまま『潰れたおにぎり』を観察していくのだろう」と想像していたが、メンバーの一人である伊藤さんが不意にこぼした『死ぬならやっぱり秋田だよな』という一言で彼ら



死に場所としての秋田

米カルテット



もっとたくさん秋田を知ってから死にたい。

それを祖母の茶碗蒸しに入れたらとてもおいしかった」「近所の猟師さんに熊を解体した肉をもらった」「休日や登下校中に桑の実をこっそり食べたら、唇や手に桑の実の色の濃い汁が付いていて、いつもバレちゃった」「ホオズキでおばあちゃんと笛を作った」など、その語り一つひとつに東北という地域性があふれていることに気がついた。「自分の周りに予想以上に食べ物が溢れかえっていてびっくりした。なぜこんなに料理が上手な人が多いのだろう?」と語る岩本さんは、改めて実感した地域の力と、そこに息づく人々の暮らしに目を輝かせていた。

こっそり食べた桑の実



佐藤さん



田中さん

ホオズキの笛の音



岩本さん

熊の肉の味



伊藤さん

「死に場所としての秋田」。誰もがドキッとさせられるこの命題と向き合った『米カルテット』。その歩みはまだまだ始まったばかりだが、彼女らが生まれた地域に、人、食、自然、文化など、数えきれないほど多くのものが在ることに驚き、実感できたことは、これからの彼女たちの歩みに、「死に場所」という強固で大きな土台を与え続けるだろう。「もっとたくさん秋田を知ってから死にたい」と真っ直ぐに語れる彼女たちがいる秋田の未来に、私たち運営チームMODも胸の高鳴りを抑えずにはいられなかった。

は更に深い所へと舵を切ることになる。美術部に所属する彼女たちの会話は、漫画やアーティストなどの「推し」に集中することが多い。しかし、この事業を通じた観察から見えてきた「地域」についての話をする中で、彼女たちにはお互いにこれまで気が付かなかった共通点があることが分かってきた。それは彼女たちが全員「死に場所は秋田(東北)がいい」と思っているということだった。

「死に場所としての秋田」という視点を持って、もう一度彼女たちの地域を見つめてみると、いろんなことが見えてきた。母と祖母のおにぎりの握り方について調査した田中さんは、「おにぎりは握り方によって潰れにくさが変わる。地域によって、同じ料理でも見た目が違うのは、こんなところからきているのかも?」と、潰れたおにぎりという結果から、そこに行き着くまでの過程に着目し、そこに人や地域があることを見出した。

さらに、彼女たちの日常や思い出を振り返ってみると、「庭で採れた栗をお裾分けしたら、甘栗になって帰ってきて、

〔左ページ上段〕

なぜか 分からないうけど ワクワクする てん

半年間続いた本プロジェクトの現場で、いつだって前髪の乱れを気にしたり、のん気に居眠りしてしまったり、とりあえず参加してまです的な態度・印象が否めなかったチーム『てん』。こういった高校生向けのプロジェクトに参加した生徒にありがちな、「先生から参加してみたら？と言われたから参加しました……」という受け身の印象が強かった彼女たち。このプロジェクトでは、主体的でやる気満々な高校生ももちろん大歓迎でありながら、チーム『てん』のような「素直で、真面目過ぎない高校生」にこそ可能性を感じ、他人事だった彼女たちの中にある「正直」を引き出してあげることが醍醐味の一つだろうと期待している。

一体全体、この「若者と地域をつなぐプロジェクト事業」とは？「国語・算数・理科・デザイン！」とは何なのか？その趣旨たるところをほぼ理解できていない状況で、ぼんやりした時間ばかり過ぎていくチーム『てん』に転機が訪れたのは、プロジェクトも折り返し地点に近い9月の集中WSの場でのこと。町の中に

人が暮らす痕跡（営み）を即興で観察してみようという即席観察ワークショップを通じて、メンバーの一人である大倉さんの気持ちは動き出す。私たちの身の周りで使われなくなってしまったものものに（役に立たなくなってしまうものものに）、なぜかそのままその場所に存在してしまっているモノの不思議さや面白さに興味が湧いてきたというのだ。

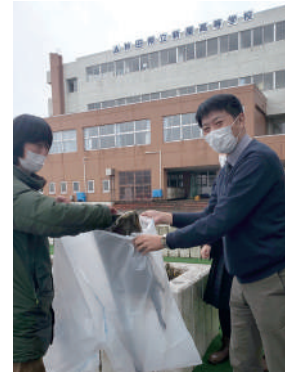
その後、「役に立たなくなってしまうものに、存在してしまっているもの」として大倉さんが身近な場所で気になったのが、自分が通う高校の敷地内に腐れ朽ちて放置された木製看板の存在だった。元々野球部の飛球に注意することを喚起するために使われていたが、その後新しい鉄製の看板ができたことで役立たずになってしまったという木製看板。そんな役立たずの看板を目の前に、「一度役に立たなくなつたものを、新たに何かのために活用できるデザインができないか？」と意気込む大倉さん。そんな大倉さんの言葉は、彼女の本心から沸き出てきたもののように感じられた。



将来は日本史の先生になりたいという大倉さん。デザインが分かる日本史の先生になっていることを陰ながら運営チームMODは期待している。

佐々木さん(左)、大倉さん(中央)、前田さん(右)

『国語・算数・理科・デザイン!』に関わり続けたい!



学校の先生(阿部先生|右)も雨の中看板の救出を手伝ってくれた



腐れ朽ちた木製看板の横に新しく設置されていた鉄製看板



腐れ朽ち、放置されていた木製看板



恐る恐る看板を救出する大倉さん



完成した看板を実際学校内に設置しちゃった大倉さん
[写真提供: 大倉さん]



トが望む「地域とつながる」ということのヒントなのだろうと感じた。

最終成果報告会で、大倉さんは「私は正直地域のために何かしたいなんて思わなかったんです。名前も顔も知らない人のために何かしようなんて気持ちにはならなかった」と断言する。そうして、大倉さんが救出した腐れ朽ちた木の看板は、身近な人たち(自分が通う高校の生徒たち)が喜ぶことに役立ってほしいという彼女の思いから、女子高生に人気のあるアイドルの写真(みんな大好きイケメンの写真♡)が貼られた看板へと変身を遂げた(笑)。このプロジェクトは、チーム『てん』の大倉さんがたどり着いてくれたような、とにかく自分に素直で、正直に、イイ意味で高校生らしく「アホ」なアクションに秘められた可能性こそを信じ、そこに期待し、待ち続ける場でありたい。そして、最終成果報告会に際し「またこれからも『国語・算数・理科・デザイン!』のような場が続くのであれば、そこに『関わり続けたい』と言う大倉さんの気持ちや意識の変化にこそ、この事業が在り続ける意味を感じている。

それならば、その腐ったポロポロの看板をまずは救出しに行こうではないかと、MODのメンバーと大雨の中、現場に向かった大倉さん。雨の中ぐしょ濡れになりながら、腐れ朽ちたそれはそれは汚い木製の看板を手にして、「なぜか分からないけど、とてもワクワクして楽しかったです。この先ずっと忘れられない体験になりました」と目をキラキラさせる大倉さんは、この瞬間にやっとな自分の気持ちに正直に行動してしまうことの大切さを実感・獲得したように思えた。

一方、そんな大倉さんの姿勢の変化に何かを感じ始めたのか、他のメンバーである佐々木さんと前田さんそれぞれも少しずつ、自分の言葉で、自分の真ん中の気持ちを話してくれるようになる。佐々木さんはどこか恥ずかしそうにしながらもスポーツ漫画に興味があるということ、前田さんは以前から気になっていたパッケージのデザインと心理学との関係性について興味があることを打ち明けてくれる。一人の姿勢が「チーム」という地域に対して小さくも影響を与えていくこのような状況こそが、このプロジェクト





ツマという

脇役に観る景色

おにぎりにごぎる。



武田さん(右)は当日欠席のため、一人で発表・奮闘した小林さん(左)

「観察」と聞いて、まずはお祭りで食べたものやペットのこと、スーパーで買ったトマトのことなどを報告をし始めた小林さんと武田さん2人コンビのチーム『おにぎりにごぎる』。しばらく身の周りの観察が続いたある日、明らかに視野が変わった瞬間があった。

きっかけはSDGへ小林さんが何気なく投稿した時のこと。それは、刺身を食べた後の皿についてだった。今までは身近で手にしたものや対象のものだけの観察に留まっていたものが、その周りにある「景色」に気が付き始めていく。そこには、誰も手を付けずにただただ捨てられていく「ツマという脇役」がいたこと。どんな役目があるのか？ 他にもそんな役割のものはないのか？ ふとした疑問から観察の強度が上がり、飛躍するチャンスがやってきた。

その後も定食、付け合わせ、鍋料理、系こんにゃく、唐揚げ、レモンやラーメン、メンマなどなど、「脇役観察」が続いたある日、2人から「高校の近くにあるスーパーに行って見学し



[写真提供：おにぎりにごぎる。]

ツマを追い掛ける 女子高生

たり、脇役を探してみたいと思っていきます。」との連絡が！
●鮮魚コーナーでツマだけ売っているのを見たことがある。
●スーパーのアルバイトでツマを作っている人もいる。
などなど、いくつか仕入れた情報を確かめるべく行動に移すことを決めた2人。これは運営チームMODも付いて行って2人を観察するしかないなど、尾行を決行！（もちろん2人の承諾を得て！）

【スーパー観察編】

それから数日後、指定されたスーパーの前で2人と待ち合わせたところ、何だかとても不安そう……。決して言葉には出さないけれど、「ツマについて突然質問するなんて……、こんな変なことを忙しそうなお店員さんに聞いてもいいのだろうか？」そう顔に書いてあるようだった。MODのメンバーは遠くから2人を見守っただけだから、2人だけで行動してみても伝えると、ますます不安そうに……。2人ピタリくっついたまま鮮魚



いざ出陣！



ウロウロ……



ドキドキ……



やっとのことで
店員さんに
話しかけることが
できた2人

ウロウロ……

コーナーをウロウロ……。店員さんがすぐ近くを通るのに一言もしゃべり掛けられないまま、気が付くと全くツマとは関係のない売り場にまで行ってしまっていた2人。そんな2人を呼び止めて、改めて話を聞くと、「店員さんに、何て声を掛けたいか分からない……」とのこと。そりゃそうだ。衝動でここまで来たんだから。ならば更に衝動的に『ツマをください』でいいんじゃない？ あつたらさらに質問して、なかったら何でいいのか聞けるじゃん！』と提案したところ、2人の表情がパッと明るくなった。聞くことが決まると速い！ 気が付くともう鮮魚コーナーの店員に話し掛け、早速何やら対応が始まっていた。しばらく経って戻ってきた2人。聞くとうやらこのスーパーではツマ単品を作ってはいないとのこと。また、週に一度くらい「ツマありませんか？」という問合せがあるとのこと。その時のためにツマだけを仕入れているとのこと、などなど。自分達の聞きたいことをいろいろと質問できてスッキリした様子の2人。

そして帰り際には「私たち観察のテーマを『ツマ』に絞っていきます！」とはっきり明言した2人。『ツマ』を追い掛ける女子高生、面白いではないか！ ということで、次の調査先は、鮮魚店が並ぶ秋田の台所「秋田市民市場」へ！

【市民市場観察編】

後日、日時を決めて秋田市民市場へ2人だけで繰り出したチーム『おにぎりにぎる』。その日のSnapにはこう記されていた。

「鮮魚コーナーを探してみましたけどツマはひとつも見つかりませんでした！そこでもなげツマが売っていないのか理由を聞いてみたところ……

- ① コストが掛かるため
 - ② 食わずに捨ててしまう人が多いから
 - ③ 刺身の盛り合わせというものがないため飾り付ける必要がないから
- ……ということでした。

市場のお刺身はスーパのお刺身とは違って新鮮なためすぐ食べてもらうためや、市場のお刺身はスーパーのように薄



『ツマ料理』チャレンジの記録



[写真提供：おにぎりにぎる。]

く切られていないためツマは必要ないのかなと感じました。ツマにあふれているだろうと思っていた市民市場に一つもツマがないなんて驚きの発見でした！」
何と、市場にはツマが全く存在していません。そしてここに特筆すべきは2人の反応。予想していた結果が得られなかったにもかかわらず、文面からは何かを得られた印象があった。目に見える分かりやすいものだけを成果とせず、その周りに存在する形にない「景色」を得て帰ってきたように感じられた。
最終成果報告会では、調査報告に加え、2人が独自に行っていた「ツマ料理チャレンジ」についても発表された。誰も見向きもしなかった脇役の「ツマ」に目を向け突っ走った2人。知りたい欲に背中を押されながら、殻を破る大きな冒険となっただろう。物事は主役だけでは成り立たない。その近くには、誰よりも実直に仕事をする脇役が、必ずいるんだぞ。そんな教訓が聞こえてくるようだった。

観察の旅 カオスの旅

平方米

(いほうメートル)

グイグイ来るチーム、それが『平方米』と言うチームに対し、初めのWSの頃から感じた印象だった。積極的に自分の考えを言葉にし、みんなの前でも臆せず意見を述べる事ができたチーム『平方米』。

そんなチーム『平方米』の2人は、日常の「食べる」に関わることを観察する課題が出された当初からどんどん日々の観察日記を投稿。妹や弟のご飯作り、道の駅、人による料理の味付けの違い、食洗機、偶然買った水ゼリーのラベル、人それぞれのスイカの食べ方、差し入れのお菓子、地産地消、ネットスーパー、台所にあったナス、食べ物の手話、ペットボトルの蓋、BBQ、修学旅行で食べたもの、中華料理店に出掛けて見えてきた「みんなで食べるということ」、などなどなど……、その観察のボリュームは今回のプロジェクトに参加したチームの中では1〜2位を争う勢이었다。

そして、もう一つこのチームを表す言葉の一つに「行動力」があったと思う。プロジェクトも中盤を迎えた9月上旬、

まだ観察に足踏み状態なチームが多いなか、2人はセリオンや千秋公園に向向き、そこで会った人たちに「食べる」ことに関連したインタビューを既に決行してしまっていた。その場に居た気になった人（全8人）に、その人の①好きな食べ物、②食事の様子と会話、③食べるに関する身の回りのニュース④思い出に残っている料理などを聞いて回った。誰かに言われたからではなく、気になったことを調べるため、実際に現地に行き、初対面の人であっても話し掛けてみる。2人にはそんな行動力が備わっていた。

そして元々広かった2人の興味の範囲は、このインタビューから更に広がっていく。「食べる」から派生して、「ゴミ拾い、猫、病気について、人と人との関わり、など。例えば、セリオンでミニたい焼きを売っていた県外の人の話から、出会いや食を通じた人との関わりについて考えたり、千秋公園の「がん」に関するイベントの中で出会った人たちの話から健康や栄養成分などについて考えたり、様々な人の話を広く聞いた分だけ、とにかく

カオスなものは、カオスなままでイイじゃない？

彼女たちの興味の範囲は広がり続けた。10月に開催されたオンラインWSでのこと。「興味のあることがいろいろあります」という平方米からの相談があったとき、運営チームMODの返答は「そのまま行ったらいいんじゃない？ 何も一つに整理したり、まとめたりすることはしなくていいから、カオスなものはカオスなままで進んじやいなよ！」だった。普段の学校や生活の中で、「カオスなもの」をカオスなまま”で進めていい場面など、そんなないことかもしれないし、大抵は無難な正解に自分を納得させようとしてしまうことが多いはず。そんな中2人は「カオスなまま進んじやいなよ！」という慣れない言葉に背中を押されたのか、「カオスの旅」を突き進むことになる。

そうして迎えた最終報告会当日。2人は会場である松下の座敷横幅一杯を横断する長さの全長15メートルの巻物を抱えて現れた。この横長の変った模造紙は「普通の紙だと面白くない、ちょっと悩んでほしい」と考えたMODメンバーの一人である柚木が2人に手渡したものだ。2人が最初にその紙を手にした時、見たこともない長さの紙に驚いていたが、行動力こそが取り得である2人の思考は、その全長15メートルの紙面全てを難無く埋め尽くしていった。

誰かに言われたからやる……というような高校生にありがちな受け身な姿勢とは打って変わって、自分達の独自の動き方でプロジェクトに関わり進めていた2人。そして、観察対象を1つに絞らないという、普通なら不安になりそうな状況でカオスの旅を切り開いていったこと。最終成果報告会でも、何か明快な成果物を求めることなく、これまでの半年間の過程を、カオスそのままに15メートルの巻物に定着させ、やり切った2人。そしてチームというくくりを超え、最終成果報告会の会場でも他のチームの状況まで常に気を配り、手を差し伸べていた2人。

そうした『平方米』の半年間の姿勢を振り返ってみると、持ち前の行動力に加えて、「良い意味で周りに染まらない」という点と「枠を意識しないでハミ出し続けることができる」という点で、抜群に輝いていたチームだった。

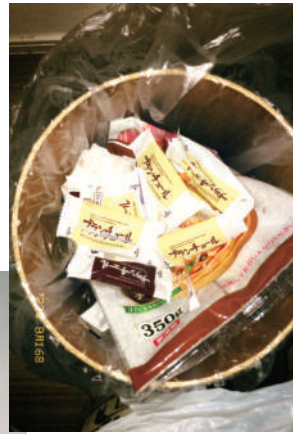
全長15mの カオス!!



運営チームMODの柚木が『平方米』の二人に15メートルの巻物状の模造紙を贈呈！
何だかうれしそうな2人が印象的！



ゴミ箱の周辺観察



「差」ゴミ箱の中身を観察



「えのぐあじ」子どものおまごを観察



開けづらい
チュッパチャップスの
パッケージ観察



絵文字のデザイン観察



[写真提供：鎌田さん]

事前説明会にアロハシャツと麦わら帽子で現れた鎌田さん。事業アドバイザーである澁谷と柚木のデザインに関する話をじっくり聞いた後日、チーム参加が条件の1つであるこの事業に1人で申し込んでくれたガッツある参加者だった。

『モアイ協会秋田支部』という、何とも秋田っぽくない名前で参加を決めた彼女の観察日記には、いつも独特のタイトルが添えられていた。タツノオトシゴの食事を観察した「すいしゅっー!」・ゴミ箱の中身を観察した「差」・子どものおまごを観察した「えのぐあじ」・下校時に民家から漂ってくる料理の香りを言葉にした「匂いバイキング」・普段の自分の足跡をレシートから観察した「レシート」など、目の前の事柄を五感を使って観^みつつ、それらを彼女なりのフィルターで切り取り、その発見を面白い姿勢は、他の参加チームだけでなく運営チームの観察をも引っ張り、刺激してくれる、強度のあるものだった。

しかし、そんな彼女の観察の旅はある頃から大きく失速することとなる……。



ゴミ箱に観^みる コミュニティ機能

モアイ協会秋田支部



自分の気持ちや状況をアウトプットして 行動することを惜しまない!

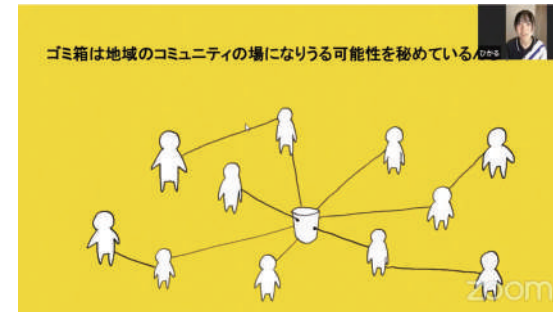
らしい言及がそこにはあった。「ゴミ」という一見「食べる」とは遠いところにあるような、あまり積極的には観望したいと思わない(汚い印象の)要素に目を付け、そこから『ゴミ箱の「コミュニティ」』というデザインの視点にまで昇華させた彼女の成果は、正にこの事業が参加する高校生たちに求める理想に近いアクションに思えた。また、自分の力でやり切ることを決断した彼女の言葉には、一つ一つ確かな重みと共に、聞く者たちを強く引き付ける強さと魅力にあふれていた。

最終成果報告会その場に来ることは叶わなかった鎌田さんだったが、最後に「自分の気持ちや状況を、外・他者にアウトプットして行動することを惜しまないことが大事!」と自分に言い聞かせるように締めくくった彼女。この事業に最後までつながろうと努力し続けた彼女の姿勢と観察のアプローチの結果は、事前に作った「黄色いモアイ」と共に確かな存在感としてそこに在った。そして、それはそこに居合わせた参加者全員の中に在り続け、つながり続けていくのではないかと思う。

鎌田さんの豊かな観察力、行動力は、本事業に収まることはなく、他にも学内の様々な場・プロジェクトで発揮されていた。次第に、並行して進んでいく他のプロジェクトとの両立が難しくなり、この事業での観察ができなくなっていたという鎌田さん。そうして、最終成果発表会の2週間ほど前、『モアイ協会秋田支部』は、この事業を断念する決断をする……。

つまり、このチームはもしかしたら、この冊子に載ることのなかったかもしれないチームなのだ。

途中辞退の知らせを聞いた我々運営チームMODは、彼女ともう一度だけ話をしたいと思い、「電話で話せないかな?」それか、最終成果報告会に向けて運営チームが大道具を準備製作する日(場)に顔出してみない?」と最後の最後ギリギリに連絡を取ることにした。もしかしたら、そもそも返信も来ないかもしれない……という我々の予想に反して、鎌田さんは車で1時間半以上掛けてでも、実際に足を運んで我々と会い、話をするという選択をしてくれた。現場に訪れた鎌田さんは、運営チームMODに直接事



最終成果報告会での成果発表のために鎌田さんが作成したプレゼン資料。会場の参加者全員が引き込まれる、興味深く分かり易いプレゼンテーションだった。



情を説明した後、最終成果報告会までやり切るという決断をしてくれる。そして、その日、彼女は残りの時間を目一杯使って、発表会当日に使うチーム看板として、文字通り黄色い大きな『モアイ』を製作して帰っていった。

もちろん、辞退する・辞めるという決断だって簡単ではない。けれど、一度諦めてしまった事を再びやり切るという決断には、更に大きな勇気とエネルギーが必要だったのでないだろうか。運営チームMOD、そして、このプロジェクト自体と最後までつながり切るという決断をし直した彼女の姿勢は、改めて人と地域とつながるために必要なたくましさを感じるものだった。

最終成果報告会当日、コロナによる事情で会場に来ることがなくなってしまう鎌田さんだったが、それでも急遽ZOOMでの発表に切り替えて発表に臨んでくれた彼女。『ゴミで観る食』というテーマの下、ゴミの観察の中で見えてきた「食とゴミの密接性」について、そして新たに彼女が発見した「ゴミ箱の「コミュニティ」という機能」という彼女

「フルーツが好きだ」

なんて言わせない

mino (みの)

「みう十のあ=mino」と名付けた2人組。初回、2回目ときちんと参加してくれた集中ワークショップでは「2人の世界に閉じている」という印象が否めなかったチーム「mino」。例えば、2人に何かを問い掛けると、2人でコソコソと相談してからどちらかが答える。どちらか1人に問い掛けると、また2人でコソッと確認してから答える。とても仲が良さそうなのは分かったけれど、内向きな視野をいかに外に向けられるかが、このチームのポイントだろうと運営チームMODは認識していた。もちろん2人は協力し合うチームだけれど、チームとしてあるよりも前に個と個でなくてはいけない。片方の足を前に出すと、自然ともう一方の足を追い越す。それを繰り返すと人は歩き出し、いずれ走り出す。2人で相談した「ほどほどの言葉」よりも、一人ひとりが紡ぐ「素直な一言」が前へ進むための指標になるのだろうと。

42



そんな印象を持ちつつ、地道な問いかけを続けながらプログラムの中盤を過ぎた頃、いっしょか2人は、音信不通になっていた……。

43

11月末、久々に2人の通う学校に、運営チームMODのメンバー自ら赴き、2人から直接聞き出した言葉が「私たちはフルーツが好き」という一言だった。

その後もそのキーワードを元に、もう一步2人の本音に踏み込みたいという思いから、粘りに粘って最終成果報告会の3日前、そんな2人と再びオンラインではあったが話すことができた。というこ

とで、その時の運営チームMODのメンバーとEinoの2人とのやりとりを、ここにそのまま載せたいと思う。

【メンターは、柚木・澁谷・柳澤の3人】

柚木「本当にフルーツが好き？ フルーツ好きは多いけれど、実は僕は苦手。それでもある時、友人が柿のドライフルーツをくれて恐る恐る食べたらめっちゃおいしかった。たくさん食べちゃった。自分みたいにもともとフルーツが苦手な人を好きにさせるって、すごい力だと思った。今の話は僕の体験談だけれど、Einoのそれぞれ1人1人が何を食べて何を思っているのか、夢中でエピソードを話してくれたら、それでいいんじゃないかな。榎さんのおばあちゃんの話もとても

気になる。フルーツしか置いていないお店もある。是非そういう場所にも行ってみたい。2人があと数日で行けるお店はある？

Eino「市民市場なら行けるかもしれない。柚木「例えばお店の人と話して、自分のお金でフルーツを買って切って食べる。そういう行動もってみたい。スマホでは本当の情報が出てこない。残りの時間は限られているけど、行動を起こしてみたい。それすらしていない人に、「フルーツが好き」とは言わせないよ。行動をもって「私たちはフルーツが好き！」って言えるようになってほしいな。

澁谷「フルーツが好き」ってどこまでいけば言えるのかな？ 2人の「フルーツが好き」って言うのは、フルーツのなにか好きなんだろう？ どの部分が好きなんだろうね？ 皮を剥いて食べるところ？ それとも味かな？

柳澤「まだ2人の表情が見えてこない。これまでのすべての講義を見てくれた2人なら、実感を出してくれるのではないかと期待している。とにかく2人が駆けずりまわって見てきた観察を見てみたい。フルーツというキーワードではあるけど、「本当にフルーツって言っているのか？」って、その問いも大事なデザインだと思う。Einoなりのフルーツへの思いを発表してほしい。

澁谷「正直、これまでのWSに参加してどうだった？」

Eino「榎一考えたことがないことを考えることが多くて不思議な気持ちになった。外に出て行って写真を撮って一気に投稿したWSで、普段なら見ないところを撮影していたら、すごい不思議なことをしてると思った。

Eino・大嶋「最初はなんでこんなこと考えるんだらう？ って思ってた難しかった。まだ何をやってるんだらうって感じがある。

澁谷「胸張って「分からねー！」って言っているよ。分かっているふりして、正しいことをいにくるのは違う。「デザインって何だよ！」って怒ってもいいんだよ。

Eino・大嶋「よく考えたら、嫌いなフルーツも結構ある。「好き」ってはっきり言えないと思った。

柚木「僕もフルーツ全部嫌だって言えない。ビタミンCをとりたくて毎日グレープフルーツを食べてた時があった。健診で医者に伝えたら、「それならサプリのの方がちゃんといれる」と言われた。でも僕は、おいしそうなグレープフルーツを店で選んで、家で切って、実も汁も絞りながら飲んでた。ビタミンCが目的だったけれど、食べる周りのことを楽しんでたんだってことに気が付いたんだ。榎さんが言っていた「晩ごはんにおばあちゃんを送ってきたりんごを食べる」とか、大嶋さんがいう「ラ・フランスを家族みんなで食べる」とか、そのフルーツの周縁のことに実は2人とも興味を持っているんじゃないかな？

澁谷「りんごを食べる時、僕の母親がいつも必ずウサギの形に切ってくれるんだ。かわいいただけでなく、皮と実の間の栄養も食べてほしいという気持ちが詰まっているんじゃないかなあって思う。「りんごを食べる」ということ「りんごを食べる時間が好き」「りんごをくれるおばあちゃんが好き」こんなことを、面を感じることをしてほしいな。

Eino・榎「フルーツが好きっていうのは、美味いから好きじゃなくて、切り方とかにも注目したいと思いました。澁谷さんのお母さんの切り方は我が家と違って、我が家では小さくカットされて、爪楊枝で食べやすくなっています。

澁谷「そういうことをたくさん感じてほしいね。是非写真を撮ってみて。前回お話を聞いた時、好きなフルーツはそれぞれキウイやさくらんぼって言うてくれたけど、気持ちに乗るフルーツでいいから。Eino・大嶋「熟した方が好きとか、固めが好きみたいな好みがりんごにもある気がするな。1つのフルーツで家族の話が広がるなと感じました。

柚木「フルーツの多くは採れたままそのままは食べられない。剥いたり、一手間掛ける必要のあるものが多い。そこには、何かしらの思いがあるのかもしれない。たかがフルーツかもしれないけど、すごく奥深いものだと思うよ。

こうして、何とか期間ギリギリのメンタリングが終了。それから3日後の最終成果報告会の日、用意した資料を無事に発表できた2人。しかし、やはり観察に費やした時間が少なかつたからか、実際に行動に移すことがかなわなかつたからか、終始自信がなさそうに、そして、楽しくなさそうに発表している姿が印象的だったチーム「tinoj」。

「売れ残りのフルーツを救済するためのポップ」を作るアイデアそれぞれ自体、とても面白くなりそうな提案なのに、実際にポップを作ってみなかつた。作って、店舗や市場に持って行かなかつた。お店の人と話したり試したりと、肝心な行動の部分がなかつたことよつて提案はバーチャルで机上の空論になつてしまつていた。それは、本当に2人が好きでやりたかつたことなのだろうか？ それは誰よりも、2人自身が一番よく分かつているのではないかと思う。

考えたことがないことを
考えることが多くて
不思議な気持ちになつた。

なぜ私たちは お菓子を 食べるんだろう？

27



小野さんは当日欠席のため、一人で発表・奮闘する加藤さん

約半年間にわたって実施されるこのプロジェクトの最終成果報告会が開催されるのは12月中旬のこと。……にもかかわらず、11月下旬まで一度も実際に顔を合わせることもなかったチームが、このチーム『27』。運営チームMODとしては「このチームは辞退かな……」と諦めてもおかしくないような状況だったが、このギリギリの危うい状況になってからこそが、「国語・算数・理科・デザイン」なる学びの場の真骨頂なのだと言認識させてくれたのも、このチームだった。

チーム『27』のメンバーである小野さんと加藤さん。11月下旬（11月25日）に初めて会えたのが小野さん。「2人はこれまでの観察を通じて、何に興味があるの？」という問い掛けに、小野さんは「お菓子が気になっています」と、どこか当たり障りのない印象の返答を自信なさそうに答えてくれた。「では、ここからお菓子について2人で深く考えてみてほしいな」とアドバイスしてその日は終了。

そして、その後も彼女たちにはやる気があるのかなのか、実感のない10日間程があったという間に過ぎ、12月の初め

（12月6日）に初めて会えたのがもう一人の加藤さん。きっと高校生なりに、ここまで参加できていなかったことを後悔めたくも思い、緊張しているだろうなと、チョコレートのお菓子でも事前に用意して場を和ませようと彼女との対面に臨んだ運営メンバーに対して、加藤さんは第一声「正直、このプロジェクトが何なのか、よく分かっていません……」と正直にバツサリ（笑）。正に「先生から参加してみたら？」と言われたから参加した……」症候群、ズバリそのもの高校生だった。きっと、このタイミングで分かったようなフリをしたり、当たり障りのない正解らしい返答をすることは簡単だったはず。でも、この場で「分からない」ということを正直に言葉にできたことは、とても価値のあることだと感じた運営メンバーは改めてゼロから、この半年間の間に進めてきたプロジェクトの過程について、丁寧に説明をしていく。

正直、2度手間であるこのやりとりは面倒臭さを感じてしまったというのが本音だが、ここで2度だろうと3度だろうと、このプロジェクトが今の彼女たちに

とって必要である意味をしつこく丁寧に伝えようと孤軍奮闘！ そんな前のめり気味なMODメンバーの熱量を感じてか、次第に目の奥の光り方が変わっていく加藤さん。その一瞬の表情の変化をMODメンバーは見逃さなかった。

こうなれば、一気に彼女たちは本音を堂々と吐き出せるようになっていく。「お菓子里に興味があります」なんて他人事でぬるいことを言っていた彼女たちが、「なぜ私たちはお菓子を食べるんだろう？」という普段なら考えもしない問いに向き合い始めていく。そして、ただ単に「おいしい」とか「うれしい」とか「かわいい」とか言っていて、ほぼ何も考えないで食べていたお菓子の裏側には、「日常におけるストレス」というドロドロした理由が存在していることに気づき始め、目をキラキラさせ始めるチーム『27』。テストのストレス、友達関係でのストレス、生徒会活動でのストレスなど……、なぜ自分たちがお菓子を食べるのか？ という問いから、自分たちの日常の隅々をリアルに感じ、認めていく彼女たちは生き

それこそがこのチームにとつての大きな成果であったことは間違いない。

ということ、以下は最終成果報告会が終わった当日の夜中に、加藤さんから運営メンバーに届いたメッセージである。

.....

今までワークショップに一度も参加できず、最終報告会を終えて悔いが残っています……。今日の最終報告会を通して「国語・算数・理科・デザイン」にさらに深く興味を持ちました。今回はお菓子をテーマに考えましたが、今の私は、お菓子以外にも、自分の興味・関心のあるもの、疑問などがたーつっくさあるので、それらを一つずつ、じっくりと観察していきます。そして私もチーム「てん」や「The morning」さんのように、今後も国語・算数・理科・デザインに関わりたいたいと思っています。これから、日常の中で見つけた気付きや感想をMODの方々にごんごん伝えていきたいです！ そのようなことは可能でしょうか……？

.....



加藤さんが最終成果報告会の前に「先日のお礼です」と、運営チームのメンバーに用意してくれていたお菓子。うれしくて食べられない。

お菓子はストレス発散！？

ストレスをためやすい性格



報告会当日は欠席だった小野さん [データ提供：チーム27]

生きていた。

そして迎えた最終成果報告会、加藤さんは「先日はチョコのお菓子をありがとうございました。先日のお礼です、食べてください」と、いろいろなお菓子がたくさん入ったお礼の菓子袋を手渡してくれた。正に、その気遣いはデザインの基本そのものだった。そして彼女は参加者がたくさんいる前で「私は非常にストレスをためやすい性格です！」「今の私の精神はズタボロです！」と、それはそれは堂々と声高らかに発表し（自分をさらけ出し）会場を沸かせてくれた！

また、小野さんは報告会当日欠席ではあったが、彼女のお姉さんが普段お菓子作りが趣味だということの理由を探求し、その結果お姉さんがお菓子を作る背景にもストレスがあり、嫌なことを忘れられる時間がお菓子作りの時間なのだという発見を成果として残してくれた。

まだ出会って2週間ほどしかたっていない彼女たちから「くだらないことって面白いんですね！」「観察することって楽しいんだ！」という言葉が聞けたこと。

くだらないことって面白い！
観察することって楽しい！



12月の最終成果報告会后、学校の「総合的な探求授業」で発表する内容についてインタビューさせてほしいということで、オンラインでやりとりした時の様子。その後の加藤さんの表情の変化、そしてその成長ぶりがうれしかった。

[写真提供：澁谷デザイン事務所]

.....

というところで、事業が終わった後も、チーム『27』と運営チームMODとのつながり（地域とのつながり）は脈々と続いている。



in the morning の2人が半年間観察した地元の風景写真



前仙北市長である門脇光浩さん（中央）に話を聞きに行った時の佐々木さん（右）と門脇さん（左）

人が増えればいいってもんじゃない

多いからいいという考えは取り除かなければならない。特に仙北市のような過疎地域では、都市部とは違った価値観を生み出さなければ生き残れない」という言葉に「地域は好きだし続いてほしいけど、人が増えればいいってもんじゃない。増えるとしても本当に魅了されて価値を感じてくれた人じゃないと嫌だ」という自分たちの感覚と似ていると感じ、前仙北市長にお話を聞きに行くアクティブさ。

そんな彼女たちは抜群の行動力を持っていると感心しつつも、何か正解を探さなければという意識から「正しさ」に流されてしまうのではないかと、心のどこかで心配もしていた我々運営チームMOD。しかし、そんな不安は彼女たちが愛する『西明寺』という土地に実際に向いて（招いてもらって）2人のお話を聞き、すっかり消え去った。「西明寺だとお話できるような場所がないんです、可能であればMODの皆さんに西明寺に来ていただいて空気を体感してほしいです！」と言う門脇さん。場所は、彼女たちが事前に押さえておいてくれた「かたくり館」の座敷だった。



地元って何？

in the morning

この事業の事前説明会に、仙北市から地域おこし協力隊の方に連れてきてもらい参加していた佐々木さん。その時、真っ直ぐな目でうんうんと頷き話を聞いていた佐々木さんが地元・西明寺の友人である門脇さんと組んで生まれた『in the morning』チーム。（実は、応募してくれたときは3人だったのだが、最終的に抜けてしまった赤倉さんも熱い思いはあったものの……、今回は諸事情により2人チームとして走り出した）

この半年間、地元・西明寺にとことん向き合い続けた彼女たち。最終成果報告会では、西明寺の特産品が食べられたり、休憩、勉強、飲食ができる広いスペースがある「西明寺に人が集まれるところを作りたい」と考えた2人。

「食べる」をテーマに実際に地域を歩き観察し、チームでよく話し合い、煮詰まった時にはお菓子やカップ麺を食べ、気になった人にはすぐに会いに行き、自分たちの目や手や足をとにかく動かしていたのが、『in the morning』だった。

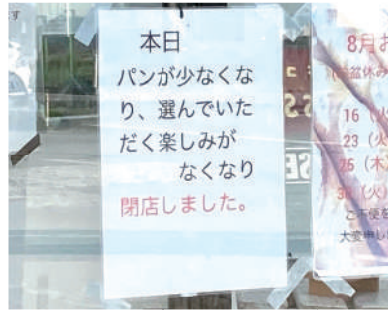
高校の講演で前仙北市長・門脇さんの話を聞き、「多数評価は前世紀の遺物だ。



in the morningの看板として2人が段ボールで作ってくれた特大のカメムシ!



最終成果報告会が終わって後日、MODメンバーの所に来てくれた2人



「バンドコロ tossi」さんに貼られていた印象的な張り紙の観察。来店したお客さんには沢山のあるパンの中から、欲しいパンを選んでほしいという店主の優しい気遣いが感じられるそんな張り紙のデザインに感動した2人。



秋田内陸線が企画する「ごっつお玉手箱列車」に乗って販売員の体験を試みた時の2人
[写真提供: in the morning]



星雪館の門脇富士美さん(中央)



かたくり館にて、MODメンバー(後列)と佐々木さん(右)と門脇さん(左)



はとっても大切なことです。特に、「誰もやったことがないことをする」にはそれがが必要です。その力をはぐくむ一歩は「自分がやったことがないことをする」です。誰もやったことがないことをするのに、自分がやったことがないことをできないのでは、話になりません。



MODメンバーからの辛辣なメッセージを活動のモチベーションにするために、そのコメントを携帯電話の待ち受け画面にしていたという門脇さん! (笑)



山の方々から地域の話を聞いてきた。最終報告会の1週間前、我々MODが報告会当日の会場を使うものを準備している場所に来てくれた彼女たちは、チームをイメージした看板を段ボールで作ってみてというお題に対し、なんと「カメムシ」を選んだ。西明寺は栗が有名だし栗でも作るのかななんて安易に考えていた我々はびっくり! 地域に向き合っ

て観察し続けた彼女たちだからこそ選べる、彼女たちらしい印象的な答えだった。

最終報告会の最後、澁谷さんや柚木さんの「地元・地元感ってなんだろうね?」という問いに2人が導き出した答えは、「自分を受け入れてくれると思える土地」「自分もこの地域の一員になれると思わせてくれる土地」と答えてくれた。「元々好きだった地元に向き合い続け、自分たちが西明寺へ深い愛や誇りを持っているということを再発見し、地域の一員としての責任感も芽生えた」という佐々木さんの言葉に、この2人はこれからもずっと地域と向き合い続けるのだろうかという覚悟を感じ、今後の西明寺と2人の成長が楽しみでならない。

佐々木さんのご実家・佐々木栗園の栗を頂きながら、彼女たちの地元愛を存分に聞かせてもらった時間。地域を歩いていると近所の人が挨拶してくれる、同級生のお家によく集まっている、中学校の先生と未だに仲が良いなど、心温まるエピソードの数々。羨ましくなるくらい地域からの愛を受け取り、素直にすぐくと育ち、自分たちの地元を誇りに思っていることが、その言葉一つ一つからよく伝わってきた。

同時に、この日2人は「西明寺に人と呼んで集まれるところが無い」と思っていたら、実はかたくり館が使える」ということや「農家民宿で何かしたいけど、実際にいくらで宿泊できるかを知らなかった」など、近過ぎるからこそ知らなかった地域のことに気付くこともできたという。そこから、更に地元を知りたいという気持ちが高まり、秋田内陸線のイベント列車「ごっつお玉手箱列車」に乗車させてもらったり、中学校の恩師や、大仙市の地域おこし協力隊である東風平さん、バンドコロtossiさん、農家民宿「星雪館」を営んでいる門脇富士美さんから沢



第2回集中WS | 2022.9.4



「国語・算数・理科・デザイン!」事前説明会 | 2022.7.10



オンライン集中WS | 2022.10.5



第1回集中WS | 2022.8.3

“デザイン”は、始まったら、終わらない。
“地域とつながる”ってことも、
ずっと、始まったら、ずっと終わらない。



「地域とつながる前に、君たちメンバー同士がつながれていないね」「そう簡単に、誰かの役になんて立てないよ」「行動もせずに、好きだなんて言わせないよ」、運営チームMODから高校生たちに投げ掛けられた、鋭すぎるかもしれない真剣な言葉の数々を思い出す。「みんな頑張ってみんな良かったね」という世の中の風潮は十分理解しつつ、それでも敢えて言うと、グループ・人それぞれにかなり差が出たように思った。自分たちから出した問いに向き合えないと言えたのか。分らないことを分らないと移せたのか。その答えは小手先のスライド資料ではなく、報告会で聞かせてくれた飾らない言葉の数々が表していた。

誰かの役に立つと偉い。地域とつながると成績が良い。ポランティア経験が必須。そういうの、もうやめにしてはどうだろうか。本人の興味や知の欲求が衝動を巻き起こし、その結果誰かにつながっていくもの。そう、決して誰かにやらされるものではないはずだから。我々大人がやらなければいけないことは、若者たちが衝動的に動き回る土壌を作ること。そして我々自身が先陣を切って楽しんでいくこと。それに尽きるんじゃないかなあと思う。

秋田公立美術大学 准教授

柚木 恵介

この事業に関わらせていただくようになって、今年度でいよいよ、石の上に3年目。2020年度の観察テーマは「通学路」、続いて2021年度のテーマは「笑い」、そして今年度のテーマは「食べる」。テーマ自体が、誰にとっても欠かせないものであり、とても素直なものであったからか、今年度の参加者から聞かれた言葉は、例年に比べまっすぐ素直で、自分自身の内面を大切にしている印象が強かった。

「名前も顔も知らない人のために、何かしようなんて気持ちにはならなかった」最初は「秋田のために」何かをしようと考えていたけど、まずは自分が楽しいことをしたいと思えるようになった。「もっとたくさん秋田を知ってから死にたい」。秋田県の事業で、そして高校生がメインの対象となる事業で、こんなにも正直な言葉が聞ける（受け入れられる）現場は稀なのではないかと、この3年目にして自負している。

昨年のこのページにも書き残したが、しつこくしつこく、もう一度ここに書き残したい。自分に正直な気持ち・感情を大切にしながら、「地域」という得体の知れない領域に寄り添っていく「態度」や「姿勢」、そして「表情」としての「デザイン」がここ秋田に根付くことを心から願っている。

澁谷デザイン事務所

澁谷 和之

高校生のメンタリングにおいて、あるグループが場所を指定してきた。山奥の川沿いにある地区集会所。出向くと、高校生たちは受付の女性と談笑しながら、奥の座敷を案内してくれる。彼女たちは窓から見える景色を見ながら、地域のことを話し始める。「車ですれ違うときに会釈してくれること、地域の人たちが声を掛けるわけではないけど遠くから見守ってくれている感覚、それが地域で一番好きなこと」

最終成果報告会で、また別のグループが秋田で最期を迎えたい理由を語った。

「学校からの帰り道に、あぜ道にある桑の実を食べて口を黒くして互いに笑いあったこと。犬の散歩をしているだけで、畑で穫れる作物をご近所からもらってしまふこと。これが地元のいいところ」

身体からまっすぐ発せられる高校生たちの言葉に、心から感じ入ってしまった。彼らを育んできた地域の環境、関係性が心から素敵だと思った。高校生たちとの出会いを通して気づいたのは、彼らの内側にすべてがあること。プログラムで教えられることなどない。育まれてきた秋田との繋がりが溢れ出るのを見守ることが私たちの役割。次の世代にもこのバトンを渡せるように取り組んでいきたい。

一般社団法人ドチャペンジャーズ

柳澤 龍

令和4年度
若者と地域をつなぐプロジェクト事業

国語・算数・理科・デザイン! 最終成果BOOK

《編集》

一般社団法人ドチャベンジャーズ

《編集・アートディレクション・デザイン》

澁谷 和之(澁谷デザイン事務所)

《写真》

鄭 伽倻(小宇宙感光)

《動画制作》

松嶋 駿(スタジオSSB)

《参加チーム(全11チーム)》

- ・マイ・バラード
- ・おたく
- ・nym
- ・米カルテット
- ・てん
- ・おにぎりにぎる。
- ・平方米
- ・モアイ協会秋田支部
- ・mino
- ・27
- ・in the morning

《運営・編集協力》

チームMOD(もっとお尻を出す)

黒崎 平(安養寺:好間風のある地域)

沼 ひかり(国際教養大学)

佐藤 香蓮(能代市 地域おこし協力隊)

松嶋 駿(スタジオSSB)

平元 美沙緒(秋田ファンリテーション事務所)

袖木 恵介(秋田公立美術大学 准教授)

柳澤 龍(一般社団法人ドチャベンジャーズ)

主催:秋田県あきた未来創造部地域づくり推進課

運営:一般社団法人ドチャベンジャーズ

企画・トータルディレクション:澁谷デザイン事務所

2023年3月発行

全11チームの
最終成果報告会の
様子はコチラから

